

米国から「学問のすゝめ」

武内 宏樹

5月から6月にかけて、米国の大学では卒業式シーズンを迎える。筆者が教鞭を取るサザンメソジスト大学(SMU)でも5月18日に卒業式が行われた。今年の学部卒業生の多くは、筆者が大学院に留学するために米国の土を踏んだ1996年の生まれで、卒業生が生まれ育ってきたのと同じ年月を米国で生きてきたのだと思うと感慨深かった。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」という著名な一文で始まる『学問のすゝめ』は、福沢諭吉が1876年から1880年にかけて断続的に著した17の小篇をまとめたものである。社会的身分などによって差別する偏見と狭量を否定し、本来平等に生まれてくる人間に差異をもたらずのが学問であるという福沢の主張は、今のトランプ大統領を誕生させた米国社会に示唆的であると言えるかもしれない。

統計を見よう。2017年の被雇用者(25歳以上)の給与年収について、米国全体の平均が約4

万7000ドルであるが、博士号もしくは、法科大学院や経営学大学院などのプロフェッショナル・スクールで学位を取得した人は9万4000ドル、修士号保持者が7万3000ドル、学部卒が6万1000ドルである。これに対して、高卒のそれは3万7000ドル、高卒未満の人の平均年収は2万7000ドルまで減少する。また、失業率を見ても、全米平均(2017年)は3・6%であるが、博士号もしくはプロフェッショナル・スクールの学位保持者平均は1・5%、修士号保持者2・2%、学部卒2・5%に対して、高卒平均は4・6%、高卒未満は6・5%である。いずれの数字も大学卒業がターニング・ポイントになっていることがわかる。

思い出してみると、2016年の大統領選挙では多くの人が高等教育を受けられるようになるにはどうすればいいかという問題が争点の一つになった。民主党内ではバーニー・サンダース氏は高等教育無償化を、ヒラリー・クリントン氏は奨学金

の拡充を提案し、かなりの議論があった。Tuition(「授業料をタダに」という短いスローガンが、ツイッター上の字数制限ゆえに幅を利かし、短いゆえにわかりやすい。したがって、「奨学金をいかに増やすか」と筋道立てて議論しようとしたクリントン氏は分が悪かった。

米国の大学では、SMUもそうであるが、学費の高い私立大学ほど奨学金も充実している。実際の学費負担となると他大学とあまり変わらない。一方で学費と教育の質が比例する現実もあるので、SMUのように学部教育に力を入れていく大学のほうが、大学院教育にフォーカスしている大学よりも学部教育の質は高くなる傾向もある。言うまでもなく、優秀な学生ほど奨学金の恩恵を受けられるわけであるから、こうした状況で州立大学の学費を無償化するとどうなるか。答えは簡単である。奨学金がもらえる優秀な学生は皆私立大学に行ってしまう、州立大学は奨学金がもらえなかった学生が行く「マイナーリーグ」に墮することになる。広範な支持を集めることには成功したサンダース氏ではあったが、大衆受けはしても、結果として公立大学の質を大幅に落とすことになる高等教育無償化を声高に主張する姿は単なる「ええカッコしい」と言わざるを得ない。

さて、「救世主」(Savior)と崇めて熱狂する支持者たちを前に、相手にわかるように説明するか、自身の考えをエビデンスで裏付けるといふ、

社会人としての基本的なマナーやルールを守ろうとする姿勢が皆目見られないトランプ氏であるが、こういう厚顔無恥な態度は、アイデンティティを失ってしまったがために多様性を受け入れることができない人たちにとっては、むしろ「福音」に聞こえるのであろう。ツイッター上で幅を利かせる短いフレーズ、センセーショナルな言い方、極端な言い回しは問答無用として他者をシャットアウトするものである。しかし、自分の考えをエビデンスに基づいて論理的に説明するという点においては、相手にわかるように説明するという点においては、家柄も性別も階級も人種も国籍も年齢も関係ない。この意味において人は平等であり、そしてこのことを身につける場が高等教育なのである。

今年の卒業生が生まれた1996年は「冷戦の勝利」の余韻がまだ残っていた。今や大統領が「米国内第一」というスローガンを掲げて、米国の「国際主義」に基づいた世界秩序の運転席から降りることを明言するという難しい時代になった。「World Changers Shaped Here」というモットーの下で学んだSMUの卒業生は、アイデンティティを失わずに多様性を受け入れる寛容な精神を持って、変化を恐れず、グローバル化が後戻りできない世界の様々な場面で問題解決ができる「人財」として活躍してくれると確信している。

サザンメソジスト(SMU) 大学准教授